

【書評】週刊読書人（2022年3月11日号）に澤 正宏著『核災10年、福島からの声―原発・裁判・文学の記録―』が掲載されました。

澤 正宏編著

核災10年、福島からの声

原発・裁判・文学の記録

「核災がなぜ起きるようになったのか。一〇年以上前に遡り、反省を込めて多様な角度から掘り起こさなければならぬ」――東電福島第一原発から放出された大量の放射性物質を前にして、「書くこと、研究することの無力さを感じたか」に思い知らされた文学研究者が、苦悶の末にたどり着いた結論。その著者が、「すべてをかけて」資料を収集し、評価・選別し、記録として活字化した一〇年の集大成である。

「と断じる。核災への反省もなく国や電力会社、一部自治体、司法までも含む「支援」の下で、原発再稼働による利潤追求に走る東電。その結果、「量産される核廃棄物、汚染水の海洋放出で地球環境を深刻な放射能汚染に晒してしまうなどの問題が鮮明に見えてきた」という（第一章）

「核災がなぜ起きるようになったのか。一〇年以上前に遡り、反省を込めて多様な角度から掘り起こさなければならぬ」――東電福島第一原発から放出された大量の放射性物質を前にして、「書くこと、研究することの無力さを感じたか」に思い知らされた文学研究者が、苦悶の末にたどり着いた結論。その著者が、「すべてをかけて」資料を収集し、評価・選別し、記録として活字化した一〇年の集大成である。

本文四三二頁を通読し終えて真っ先に筆者の頭に浮かんだのは、二〇二〇年三月二日の仙台高裁前の光景だった。浜通り避難者訴訟控訴審の判決を受けて、報道陣の力

「核災がなぜ起きるようになったのか。一〇年以上前に遡り、反省を込めて多様な角度から掘り起こさなければならぬ」――東電福島第一原発から放出された大量の放射性物質を前にして、「書くこと、研究することの無力さを感じたか」に思い知らされた文学研究者が、苦悶の末にたどり着いた結論。その著者が、「すべてをかけて」資料を収集し、評価・選別し、記録として活字化した一〇年の集大成である。

を覚えて、『今すぐ』原発を廃止することの重要性」に達し、訴える（あとがき）。

「核災がなぜ起きるようになったのか。一〇年以上前に遡り、反省を込めて多様な角度から掘り起こさなければならぬ」――東電福島第一原発から放出された大量の放射性物質を前にして、「書くこと、研究することの無力さを感じたか」に思い知らされた文学研究者が、苦悶の末にたどり着いた結論。その著者が、「すべてをかけて」資料を収集し、評価・選別し、記録として活字化した一〇年の集大成である。

「核災」二二年目の現実の一端である。「これらは原発災害の序章であり、これから災害後の惨劇が始まる」という著者の、一〇年前の予言が改めて立ち上がっている。（むらた・ひろむ 川南相馬市からの避難者・原発事故被害者団体連絡会幹事）

「核災がなぜ起きるようになったのか。一〇年以上前に遡り、反省を込めて多様な角度から掘り起こさなければならぬ」――東電福島第一原発から放出された大量の放射性物質を前にして、「書くこと、研究することの無力さを感じたか」に思い知らされた文学研究者が、苦悶の末にたどり着いた結論。その著者が、「すべてをかけて」資料を収集し、評価・選別し、記録として活字化した一〇年の集大成である。

★さわ・まさひろ 現代文学研究者・福島大学名誉教授。著書に『詩の成り立ち』、『詳説福島原発・伊方原発年表』など、編者に『近現代日本語辞典選集』など。

資料があぶり出す「福島核災」の実相

文学研究者が記録として活字化した一〇年の集大成



A5判・450頁・3960円  
クロスカルチャー出版  
978-4-908823-96-1  
TEL. 03-5577-6707

村田 弘

一九七〇年代に繰り広げられた福島第2原発と伊方原発の反対運動・裁判資料の解題と解説を収録した第2章を挟んで、折々に発表してきたエッセイとエアファールング（経験）を収録した第1章、二〇一七年以降の動

メラの前に立った早川篤男原告団長の眼に涙が光った。「やっと分かってもらった。万感の思いが溢れていた。判決主旨には「被告が原子力発電所の安全確保に重大な責任を負い、その安全性についての地域住民の信頼の上に第一原発をこの地に立地してきたにもかかわらず、具体的な対策工事の計画又は実施を先送りした中で、本件地震及び津波が発生し、本件事故の発生に至ったという経緯を被害者」など、編者に『近現代日本語辞典選集』など。